

農林水産業人材確保・育成戦略検討委員会 第1回分野横断会議 議事要旨

1 日 時

令和6年6月5日(水) 13:00～15:00

2 場 所

京都ガーデンパレス 鞍馬

3 概 要

(1) 開会あいさつ(小瀬部長)

農林水産業を取り巻く状況として、先月25日に食料・農業・農村基本法の改正法が成立した。今回の改正では、食料安全保障を明確に位置付け、この実現に向け専業者だけでなく、多様な人材もしっかり育成していくこととして位置づけられ、今後の人材育成のあり方も含め日本農業の転換点を迎えることとなる。京都府においても専門教育機関である農業大学校、林業大学校に加え、宇治茶、畜産、漁業の3分野の試験研究機関と民間の事業者等の協力による学舎の取組により人材確保・育成に努めてきた。その結果、農業では企業的な経営体の増加、林業では若返りが一定図られ、漁業では卒舎生から女性の正組合員が誕生するなど成果が表れている。一方、農林水産業の担い手は約7割減少し、高齢化により農山村漁村の維持が難しい状況にあり、兼業副業や子育て世代、定年後の世代あるいは農福連携などいろいろな方に農林水産業へ関わっていただくことを考えている。本会議では農林水産業の専門的な知識技術だけでなく、経営、マーケティング、移住、共生社会、リカレント、広報戦略など様々な分野の専門の方に参加いただいて意見をいただき、農林水産業の人材確保の施策を組み立てていきたい。

(2) 議 題

① 今後の京都府農林水産業を支えるために必要な人材について

② ①の人材を育成するために必要な施策について

○京都のような中山間地域が多いところは、担い手の減少が地域の減少に直結するため、ビジネス的なマインドを持った専業者を育成し、そこへ半農半X、高齢者障害者等の多様な人材をいかに巻き込んでいくかが重要。施策としては、本会議のように分野横断で議論する機会がこれまでなかったため、分野横断的に担い手を育成していくというのは新鮮で良い取り組み、他方これまでの施策を点検し、十分な伴走支援ができているか検証が必要。

○儲かってワクワクして人が集まってくるような形に事業転換しないと根本的な解決にならない。農林水産業のシーズは素晴らしいものがあるので、そこに府のフードテック構想やスマート農業のような新たな技術、ITやテックなどの分野の方々が関わっていくことで

価値づけをしていく必要がある。地元の人と新たに入ってくる人をつなぐ役割の人の存在が重要。地元で活躍するためには地域を知らないのもだめだし、どっぷり入り込むのも新たな価値が生まれにくくなるため、うまくバランスを取る必要があり、そこをコーディネートする人が必要。経営能力やビジネス系のセンスがある人が入ってくる必要がある。今後は二拠点生活という考えについて、他地域と連動して補完していくような政策を推進していくことも考える必要がある。

○府の方向性がまさに答えと考える。ただ、これを持続的にやっていくためにはどうするかというところ。一つとして、京都のブランドをいかに使っていくかというところが重要。京都には伝統産業がいくつもあり、大手の企業が存在する。一方、林の分野では北山杉や京銘竹など有名なブランドはあるが、大手企業はない。京都のブランドを使っていかに売れるものを作るか。また、伝統産業において昔のやり方を続けているところはなく、時代に合わせて伝統の中の要素を抽出して、変化に対応してきている。売れるものができれば、人は集まり育成される。

○農林水産業を支える人材として、地域で産業や雇用を生み出し、地域や従業員と共に成長を目指す志のある経営者を育成することが重要。京都の地で経営者として夢を見られるというところ、志の高い人同士の出会いの場が重要。人事労務管理のスキルアップなど雇用の経営に踏み出すための支援が必要。意識の高い人が集まってくるような、京都ではこれだけ儲けている、生き生き働いているというような、県外からあこがれをもって入ってきてもらえるような PR 施策が必要。そのためには、京都府内のそれぞれの地域でしっかりと儲けて暮らしていけるようなビジネスモデルを明確にしていくことが必要。

○グローバルな視点で物事を考え、ローカルでアクションを起こしていけるグローバルな人材が一次産業に入っていけると面白い。京都はインバウンドや世界に接続できる都市部をもっており、そこと丹後などのローカルな地域とを掛け算した事業が作れる人材が1つの切り口。今回の会議が分野横断であるように、その産業に閉じずに仕事ができるような人材、例えば一人で農業と林業や、農業と漁業などマルチな一次産業の担い手の育成は面白い。専門家の育成はもちろん重要であるが、その専門家を下支えするセミプロのような人材も必要。ビジネスの世界でいう BPO のように部分的にアウトソーシングするようなことができると地域の高齢者や3世代の方など幅広い人が関われるようになる。また、それをコーディネートする人が必要となってくる。都市部の3次産業に従事する人材を獲得し、リモートで働いてもらいつつ、そのスキルで地域に貢献してもらおうというような方向性もあると思う。

○工業分野においても担い手不足は同じで、技術の継承等に難を生じていている。そのよ

うな中、自社では子供たち向けの理科教室を開催しており、特に理系女子の育成等に理解を促進するような事業を行っている。京都の農林水産業のブランドは高いものがあると思うので、京都で働くのはこんなに面白いということ、技術の点では昔と変わってこんなに変化しているということをお子孫たちに伝えていくということのも一つの施策。

○人材育成という観点から、子供たちにいろいろな体験をさせることが重要。スマート農業など女性でも体力を使わずにできるようになってきている。また二次産業では加工開発などの分野で参入できるリーダーを育成していく必要がある。他の地域からきてコミュニティづくり、街づくり、子育てなど地域に根差して活躍するためにも、女性の活躍は大事。農大、林大等の新入生のデータについて年齢や性別、その動機についても分析することで、広報や誘導などいろいろなアプローチにつながると考えられる。

○分野横断で人材育成や情報発信を実施していくというのは、他の自治体ではないところなので、良い取り組みと思う。ただ、PRの強化をしても点と点がつながらなければ持続可能な取り組みに繋がらないので、どういう広報戦略で行くのか、長期的な目線で考える必要がある。また、人材の確保も育成も各フェーズがある。例えば、確保に関しては、興味、関心から、実際の応募のステップ、相談のステップなど、育成に関しては、就農・就業時、経営を安定させる時期、発展、その後の輸出、6次産業化などがあるが、そのフェーズごとにどう支援していくか検討していくべきであり、それぞれに応じた広報戦略をとっていくことが必要。

(事務局) 追加資料により欠席委員の意見紹介

(3) 質 疑

○1点目として担い手の数が減ることに対する根本的な課題は何か。例えば生産量の減少なのか、地域として景観の維持ができなくなることなのか、人を増やすことで何を解決したいのか。2点目として意見・要望で受入体制の整備(住居等)とあるが、例えば農山村漁村へ移住を検討している人は多いが住居の確保の部分がボトルネックで決まらないことが多いが、農林水産業も同じ構造になっているのか。

(事務局) 1点目について、産業政策として産業を発展させていく点については、特に農山漁村では農林水産業が大きなベースとなるので、個々の経営能力を高めて産業を牽引していただく。他方、地域施策としては兼業者等も含めいろいろな関わり方をもって農林水産業に従事し、地域に定着いただく人を確保していきたい。そのため、産業施策と地域施策の組み合わせにより農林水産業の振興と地域活性化を担う人材の確保が重要。2点目について、農業では、府の支援事業の中で実際に農業を教える方や生活面での世話人の体制

について、地域差がある点が課題、林業では、移住と同じような構造があるものの、事業体によっては住むところを提供するところもある。水産業でも、移住と同じような構造があり、特に漁村という閉鎖的なところでは地域によって受入の積極性に差がある。

○それぞれの分野で離農・離業されていく理由は何か。

(事務局) 農業では、70代、80代の割合も高く、主に高齢による引退、林業では賃金が安い、肉体的な作業が多い、農山村の暮らしになじめないなどの要因、水産業では、特に個人漁業では高齢によるもの、また、組合員資格の継承者がいないというところ。定置網などでは乗組員でなく選別の作業員の高齢化によるもの。

○京都府の人材確保・育成の取組については独自性があり充実しているイメージだったが、論点②で就業相談の減少に対し、効果的なPRが必要というのは、他都道府県に比べて京都府は遅れているという認識なのか

(事務局) 農林水それぞれに施策を展開している中で、例えば就農相談会や、就業フェアなどイベントが小ぶりであり目立たない。一方、他都道府県では大々的にやられているケースが多く、京都府は見劣りする部分があるため、分野横断で開催することで相談者を確保する意味において一定のメリットがあるのではと考えている。

○最近では農山村へのIターンで生き生きと活動している人が多い印象。専業者でなくとも地域とつながることによって、Iターンした人と、地域の人とウィンウィンの関係を構築できるようなコーディネーターが必要。これは漁村部でも同じ。やはり地域の独特な慣習があり、都会の人たちが馴染みにくい部分もあるが、Iターンの人が増え情報共有や交流が増える前向きな動きを支援するような施策を進めてもらいたい。

(事務局) 農山漁村に関わっていただく方を育てるにあたって地元市町村や地域の方々の協力がなかったらなかなか定着につながらないので、市町村や地域の方と連携したサポート体制が必要と考えている。そんな中、ご指摘いただいたようにコーディネーター的な役割を担っていく方の育成や関わりについても今後議論していきたい。

○ジョブカフェや新規就業、移住者の詳しいデータがあれば共有してほしい。意図としては、ジョブカフェの相談件数は減っているが、その年齢層や男女比がどれくらい減っているかを見ることで、課題となっていることの要因の分析につながってくる。また、相談には来たけど実際に就業しなかった要因を洗い出す必要がある。その中に受入体制や移住関連の課題解決への道があるような気がする。

(事務局) 年齢や男女比、相談が就農につながらなかった要因等のデータの収集、蓄積があるので、今後提供させていただきたい。

○分野横断で検討するメリットを改めて教えていただきたい。

(事務局) 今回の人材育成戦略のポイントは分野別だけでなく分野横断の部会を設けているところ。農林水産業以外の幅広い知識、人脈がこれからの農林水産業の経営に必要ではないか、あるいは地域を支えるような人材の育成や共生社会を実現するためには今までと違った価値観やアプローチをもって確保していく必要があるのではないかという視点から、農林水産という枠にとらわれず、もっと広い分野の意見をいただいて、検討していくという目的で分野横断会議を立ち上げた。

○京都へ学びに来る学生はたくさんいるが、就職のタイミングで出て行ってしまうという課題があると思う。学生の期間でどれだけ京都を好きになるか、地域の人とつながりを作れるかが重要。例えば府立海洋高校でも同じ課題があり、寮と学校の往復のみの生活で宮津の街を全然知らない状況があった。地域とのつながりができ、宮津の街で暮らすのはいいよねという体験ができれば、一定数その地域で働き続けることを検討してみようとする人が出てくる。農大や林大等に府外から来ている人が京都で働くことを検討しているのか、出ていく前提で来ているのかは気になるところで、京都に住んでいる期間に何かしらの関わりみたいなことを設計することは担い手の確保に繋がると思う。

(事務局) 農大は全寮制をとっており、老朽化の問題もあるが、全寮制をどうしていくかという議論をしており、地元綾部市との意見交換の中でも寮生と地域のつながりがほぼないことを課題の一つとして挙げている。例えば地域の空き家に住んでもらうことで、地域とのつながりもできるのではという意見は出ている。その場合、農大の希望者の増減に与える影響を見極める必要はあるが、いずれにしても地域との関わり方については議論していく必要がある。一方、林大では、地域の町営住宅などに住んでいて、一定数定着しているという状況もあり、専門教育施設の学生の住居をどうするかというところについてもう少し深掘りしていく必要があると考えている。

○ジョブカフェ等で相談件数や研修後の就業数などの数値について、非常に重要な点ではあるが、一方で、和歌山県の紀の川市や宮崎県の新富町の取組では、より多くの新規就業者の確保という視点は一緒だが、最終的に就農する際はかなり厳しい研修制度をとっている。これは、少しでも本気の方、将来的な起業家マインドを持っているかというところを見極める戦略をとっている。これらの地域の担い手は年に数名しか就業しないが、結果的

に部会の中では一番収量を上げていたりする。人数を多く出す視点も重要だが、他県から優秀な人材を入れていくという視点も必要。

（座長まとめ）人材確保・育成の取組について、検証する必要があるということ。短期で出てくる効果もあれば10年20年かかるものもあるため、長期的な目線で検証していく必要がある。儲かっていることがわかれば人は入ってくるということ。具体的に儲かる、明るい未来が描けるということがすごく大事であり、それをPRしていく必要がある。地元と外部者をつなぐ人材、コーディネーターは非常に大事な役割を果たしており、こういった人材の育成が必要になってくる。京都は有名ブランドの集合体であり、伝統の強みを生かせば大きく成長しうるため、人材育成の中に取り込んでいけたら良い。特定の人材に最初から集中させるのではなく、幅広に関心を持つ人に裾野を広げて、そこから頂点の部分を高めていくという戦略もある。本会議もあと数回開催されるため、今後本会議の特徴である分野横断的なメリットを生かし各分野のシナジー効果が生まれ人材育成戦略に組み込まれることを期待する。

（４）閉会あいさつ（小瀬部長）

育成すべき人材については、農林水産業へどういう関り方をしていくべきかという視点で整理していたが、共通してどういうマインドや問題意識を持った人を育てていくかという視点も必要という点については大変参考になった。分野横断でしっかりとサポートしてというような体制であったり、いろいろな主体との連携ネットワークの中から幅広の知識を学んでいける体制であったり、最先端の技術との融合であったりというような我々が想定していた視点について、概ね前向きな意見をいただいたと認識している。具体的にどのように進めていくという点については、今回の意見を踏まえ、また分野別会議の議論も踏まえて案を作成していきたい。